翻　刻

硯海の一勺・扇のことば（福羽美静述）

解題

いずれも福羽美静述、野村伝四郎編。（一）『硯海の一勺』明治二十五年六月三十日、博文館出版。洋装本、全一冊五十二頁。（二）『扇のことば』明治二十六年八月筆・和綴写本、八丁。

（一）『硯海の一勺』は、随筆・詠歌等の二十編で構成される。いずれも国民に対する道徳涵養を取り上げた文言と、その宣布的意図が窺われる内容となっている。この中に於いて、これまでも注目されてきたものに、「笏の記」がある。福羽自身の心構えを、「進取、文明、尚徳」の三言に集約して笏に記したということもあって、福羽の合理的・開明的な思想背景を端的に示したものとされる。さらにこの一編には、「わが大帝爵の天皇は。祖宗博愛の政事を本とし、維新五条の誓言を実にし。終に世界になしたまふことあるべし、海外無帝共和国の政事のいできたるは、後日、有帝和楽政府のいできたらんことをしるに足れり」との言辞もあり、それは師である大国隆正の「万国総帝」「大攘夷」を謳った理想と抱負そのままが読み取れる。

（二）『扇のことば』は、明治維新以降の国運発展を歴史的に辿りながら、さらなる飛躍を期すべく、国家国民の心構えを簡便に語っているもので、王政復古は「明治勃興」と称すべきと喝破する、福羽独特の歴史観・世界観を述べた内容となっている。（なお『島根評論』通巻第百七十九号に於いて、『扇のことば』の紹介がなされているが、扇面文については翻刻されていない。）

福羽美静（一八三一～一九〇七）は、天保二年七月十七日、石見国津和野藩藩士福羽美質の長男として生まれた。幼年時にある事故がもととなり、以来小躯の身となったものの、師友の助けもあって胆力を練り、学もまた日に倍するものがあった。はじめ、藩校養老館に設けられた漢学部にて漢学を専攻し、勤皇家山県大弐の著『柳子新論』を学ぶことを通じて尊皇大義の志を深めたとされる。その後、国学部に転じてからは、冨長山八幡宮神職で、養老館にも出講していた岡熊臣のもとで律令を学び、御国学びの基礎を築いていった。その後、京都遊学の機会を得て、当時、家塾・報本学舎にあって「本学」を提唱していた大国隆正に就いて学び、隆正の時世論に影響を受けたとされる。また隆正の門人でもあり、近江八幡肥料商人の西川吉輔との親交を通じて、往来の志士達と交わることにもなる。また『近世畸人伝』の著者で知られる伴蒿渓の子孫宅にも出入りしてその蔵書で学び、その後江戸に於いては平田鐵胤のもとで学ぶなど、学問の深奥を極めたことであった。幕末動乱期にあって、学習院を中心とした尊攘運動に加わり、禁門の変に際しては長州藩と行いを共にせんとしたが、藩主亀井茲監の深謀遠慮によって帰藩を命じられ、以後は、藩内の社寺整理に同藩士大谷秀実らと携わる。この経験が、はからずも後の明治神祇行政を推進する基盤ともなった。明治新政府にあっては、明治三年の神祇官特立に伴う大教宣布運動を推進し、また幕末以来の懸案でもあった耶蘇教への対応に接している。その後、神祇省から教部省へと慌ただしく変容する政情の中でも、常にその求心力として活躍したが、薩摩藩を強力な後ろ盾とする神道一派との間で国民教化政策での意見に齟齬が生じ、爾来政治・宗教政策の表舞台から退くことになった。福羽は、明治天皇の即位式立案にも尽力し、幕末期に水戸藩献上の大地球儀を大前に安置して、天皇の御足をもって左右左と御靴で踏ましめて、日本の世界雄飛を象らんと構想したが、天候の悪しき折りもあって実現しなかったことが伝えられる。この他にも福羽は、明治新運に合わせた論策を数多提案しており、旧慣派からの非難には激しいものがあった。明治二年の天皇大坂行幸には供奉役の一人を務め、東本願寺の行在所にあって『古事記』を講読。本末を踏まえた天皇への君徳培養には終生身を尽くしている。幕末から明治へと移行する政治変革の背景にあって、国民精神の作興と宗教維新の立て役者として、福羽美静の名は維新史に冠絶たるものがある。

（中村　聡）

福羽美静先生 硯海の一勺目次

題群盲探象図……一丁
手鞠歌……二丁
かぞへうた……二丁
童子訓……三丁
むさし野みやげ……六丁
女徳……八丁
年中行事歌……十丁
詠人道歌并短歌……十六丁
日本歴史歌……十八丁
古典歌……二十一丁
桃太郎誦歌……二十五丁
奉祝立皇太子古調今調二首歌……二十八丁
祝言……三十一丁
笏の記……三十一丁
あるときの作……三十三丁
ある所の園遊会にてしるしける詞……三十四丁
人のしるべ……三十五丁
鶯花文談の中……四十二丁
人々出世のあらまし……四十四丁
人の道早わかり……五十丁

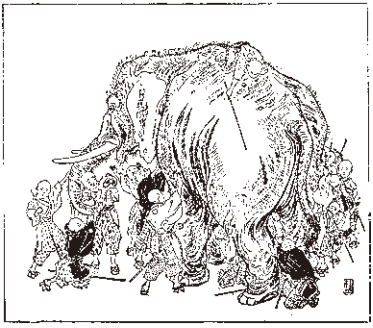
福羽美静先生 硯海の一勺目次終

福羽美静先生 硯海の一勺

題群盲探象図

みる所狭ければおもふ所
小なり人はそのみる所を
大にししかしてそのうご
くべからざる所を執るを
よしとす」

おのがみるところ
　ばかりをいひ〳〵て
世のひろけさを
　おもはぬや人



○手鞠歌

一ッ　人々礼義が大事
三ッ　みなさん辛抱が大事
五ッ　いつでも養生が大事
七ッ　なによりかせぐが道理
九ッ　子ども衆は学校が大事
二ッ　深イは親子の道理
四ッ　よの中ひらけて繁昌
六ッ　むら里次第に繁昌
八ッ　やまには草木が繁昌
十ヲで　とよ年五穀が繁昌

○かぞへうた

一ットヤ　人はこゝろが第一よ〳〵
二ットヤ　二たびかへらぬ光陰を〳〵
三ットヤ　三四五のをさなごが〳〵
四ットヤ　よき友撰びて交はれよ〳〵
五ットヤ　いつ迄いへども尽せぬは〳〵
六ットヤ　昔をわきまへ今をみて〳〵
　みがいて修て世を渡れ〳〵
　空しく過してすむ物か〳〵
　智識をそだつる幼稚園〳〵
　善友よき師は身の守り〳〵
　わが身を育てた親の恩〳〵
　今より開けんよも思へ〳〵

七ツトヤ　何より大事は人のみち〳〵　人びと励めば国も富む〳〵
八ツトヤ　八千代と寿く君が代を〳〵　助くる人こそ人ぞかし〳〵
九ツトヤ　こゝろを修むる学問の〳〵　ひかりは清けし窓の月〳〵
十トヤ　ところは日の本日の光〳〵　あまねき国恩忘るなよ〳〵

○童子訓

つゞりならべていまこゝに
夫よの中のよしあしは
そのよの中をもつ人も
子どもごゝろによきことを
人にほめられよき世をも
あッぱれよき国よき政事
子供のならひによれるなり
からだをそだて智恵をまし
すゝんで恩義も猶おもひ
長　者をあがめ師を敬し
礼をつゝしみ儀をならひ
先祖のつたへし家の名を
親類縁者をなやまさず
たつる場合を心がけ
よみかき勘定怠らず
たゞ少年は少年の
たとへ変事に出逢ふとも
さわがしからずうろたへず
をかしきことに出逢ふとも
女は殊更しとやかに
細かきことに気を配り
童子のをしへ申すなり
そのよの人によれるなり
はじめは誰も子供なり
よくおぼゆればよき人と
つくりいだせる人となり
それをなすのも其人も
子どものまなぶ学校は
行状正しく根気よく
つよばりすぎず弱からず
尊信すべきを尊んし
おの〳〵業を大切に
けがすことなくほめさせて
おの〳〵人たる一身を
物の善悪わきまへて
人につきあひむつまじく
おこなひをして高ぶらず
人にたしかにしたがひて
正しき子ぞといはるべし
高わらひせずあなどらず
人にほめられ愛せられ
それをならひに成長し
夫を助け家をもち
よにつくり出す役目あり
あれはよき子ぞよき育ち
たのもしき子ぞよき子なり
人のいふまでほむるまで
たとへするどき子なりとも
としうへの人学者等の
たちまち合点ゆかずとも
二言といはずだんまりて
もしその後にそれにます
またその時のものしりに
まづそれまでは子どもだち
君のみ為か国のため
争ふこゝろよけれども
あらそふことは用捨せよ
ばけものばなし奇妙好き
心にとめずきゝ流し
さわがしき子の生たちは
人の一生子どもより
父兄もをしへつゝしみて
心おこたることなかれかし

○むさし野みやげ

むかしの名所むさし野も
さやまの山の名にひゞく
新田義貞そのむかし
たゝかひはじめし古跡とぞ
よく子をそだてよき人を
男子は心を大にもち
たゞ何事も間違へず
あてになる人よき人と
つとめゆくべし励むべし
小児の智慧は小児なり
はなしは心にとめてきけ
道理ときかば承服し
年つもるまで貯へて
道理をかんがへ出しなば
きゝて正して改めよ
かならず争ふことなかれ
おやの為ともなる事は
たゞその外はかどだてゝ
世は人々の心にて
人はいふともかたるとも
それも争ふことなかれ
生涯おもひやられたり
定まるものとしきくなれば
それを子どもゝうけつぎて
今は桑茶のはたつゞぎ
入間久米川将軍塚
天子の為に兵をあげ
かゝる古跡を眼にみつゝ

田はたを作る農民も
王政復古の今日と
開化のすがたもみえにけり
今はひらけてたよりよし
府中立川また羽むら
古人のいさをもながめつゝ
殊更繁華は八王子
今はまことにかたり草
かよふ御世こそめでたけれ

○女徳

すべてよの中婦女の道
をみなの徳をつゝしみて
そも〳〵女の生たちは
いへのまかなひよくをさめ
いづるも入るもしとやかに
女はかよわきものなれば
みづから身をばいやしがり
ほど〳〵にしてよかるべしと
いとけなきより怠らず
いへをたもちてはぢもなく
こはかの人のつま君ぞ
人の中にて賞せられ
つとめて智恵をみがくべし
女の道にはありながら
うるさき人といはるなよ
心うすしとみらるゝな
かしらに忠義をいたゞきて
みな〳〵殊更勉強し
甲州道の鉄道も
花のこがね井国分寺
玉川上水せきわけし
ゆけば青梅や所沢
むかしの千草八千草も
花をかざして東京に
たかきいやしきわかちなく
をみなの道にかなふべし
男子につれて家をもち
子供を育てよくをしへ
とはいふものゝなに事も
人まじはりもせぬものと
物の習も勉強も
おもふは女のあやまりぞ
その業々をよくつとめ
人まじはりもたしかにて
あれはあの子の母刀自と
いへのほまれも出すまで
化粧なりふり繕ふは
あまりにかたちつくりすぎ
物のこのみもほど過て
物にたとへていはゞまづ
春あたゝけき花の園
人のほむべき花もみぢ
されどこれをばほこりがに
これは春なりほめたまへ
おのづからなる徳ありて
誰しも春をば好むなり
いはでも人はほめぬべし
すめる鏡にむかふより
心の奥もこゝろにて
誰がいひ初めて女をば
物のまなびもなさゞるを
かへすゞ〳〵も女たち
すべてよのなか人々の
育ちと習によるぞかし
これみな女の膝のうへ
さづくるはみな女子の業
ゆるかせにすな怠るな

○年中行事歌

年は一年十二ケ月
こよみにのせてあるなかに
儀式のはじめ四方拝
天地四方を拝しまし
それよりつぎ〳〵文武官
市町村里日の丸の
大陽暦の万国は
一月三日は元始祭
あゆめば誰もあかぬなり
人のよろこぶあたゝかさ
これは花なり御覧ぜよ
など、天地はいはぬゆゑ
誰しも花をばほむるなり
花も実もある人ならば
これを女の徳とみて
衣服つくろひしなゝほし
照さばます〳〵光るべし
かろしとなしておのづから
中々道とおもひけん
なすべき業はかろからじ
其よしあしは人々の
それその人を育つるは
其をさな児によき種を
女徳はきはめておほいなり
つとめよはげめ婦女子もろ人
その月ごとにあることは
一月一日元旦は
日本皇帝わが天子
世の幸をいのります
その朝拝にぎはしく
国旗を天にひるがへし
同じくけふをぞ祝ひける
天皇陛下内宮の

かしこ所の神殿に
御祖先はじめ由来ある
五日は新年宴会と
招きて祝宴はりたまふ
互に慶賀をのぶるなり
二月四日は祈年祭
年の豊饒をいのりまし
わかち給へる古例なり
明治の御代よりかぞふれば
そのかみそのよに神武帝
その日を今も祝ひます
大日本のうごきなき
末の御代までつぎ〳〵に
重き祝日この日なり
三月 春季の皇霊祭
御代々々重き天皇の
あづかり給はぬ御霊迄
二季の半にあるまつり
四月三日は神武帝
いはれ彦てふ大君の
崩御の日なれば年毎に
敬礼祭儀をつとめけり
五月この月十四日
出雲大社はこのくにを
その前国のあるじにて
地神のあるじと崇めきて
ちぎりて祭をなす事ぞ

天神地祇と御代々々の
その神かゝをまつりまし
内外貴官を宮中に
この頃世間おしなべて

これは日の本上古より
大社々々に幣帛を
十一日は紀元節
二千五百のとしをへし
大和の国に御即位の
一年一度の御大礼
皇位国体億万の
祝ひ祭らせたまふべき

これは三月九月にて
その式年のみまつりに
祭らせたまひて春秋の

御代の大御名神やまと
後のおくり名神武帝
天下こぞりて実情の

出雲大社のまつりなり
天孫天祖のしろしめす
いはれは遠く長けれど
天皇万民もろともに

六月二十一日は
あつたのみやは天皇の
宝剣こゝにとゞまりて
七月今月十二日
祭事を行ふことぞかし
天子の御難に奔走し
日本臣子の鏡とて
八月四日は北野なる
天満宮は菅はらの
時の大臣あとよりは
そも〳〵公はわがくにの
其時開化の漢学と
人にすぐれし英才の
誰もあふげることならん
九月秋季の皇霊祭
十月伊勢の神宮の
伊勢の神宮内宮は
三種の神器のその一つ
その別殿の外宮には
年中度々の御まつりは
十一月の三日をば
これすなはち当今の
天下楽しき日なりけり
二十三日は新嘗会
天神地祇を勧請し
古式をたがへず年々に
供へまつらす神事なり

尾張の熱田の祭りなり
三種の神器のその一ツ
在ます宮居の祭りなり
湊川なる楠公の
楠公くすの木正成は
其身をすてにし忠節は
祭らせ給へることぞかし
天満宮の御祭日
道真公と申したる
文事の神とぞ仰ぎける
固有の尊王赤心と
併せて国の用となし
その徳万世かゞやきて

その三月のごとくなり
神嘗祭のまつりあり
天照します大神と
神鏡こゝにしづまりて
豊受大神おはします
つきせぬみかどの御尊信
天長節とぞいはひける
天皇陛下の御生日

これはみかどの宮中に
その式こと〴〵古例にて
年の新穀その初穂
古今世の中世の事は

古式今式とり〳〵に
換ふべきものと換ふまじき
改良進歩をはかりゆく
それをつくしてつぎ〳〵に
もとゐに報ゆる時あらん
十二は月のすゑの月
これ六月の終りにも
そも〳〵こゝに年中の
人の大事はよの中の
親と教師の力にて
おの〳〵男女一人の
ちから次第に家をもち
積りて其世をよき世共
人より誉させ称美させ
尊信せられてわが国の
日の本日の丸日本人
事物の繁栄その中を
忠孝みがきて千万年
怠らぬこそ人の世の道

○詠人道一歌并短歌

尊きは人にぞ有ける
あしびきのやまべをみれば
しげりあふ草木のみかは
其中にこもりて有けり
その草木つかふも人よ
よの中の物の中にて
用ゐてわたれる其中の
ものをみわけてつぎ〳〵に
道理は人の道ぞかし
日本太祖の皇帝の

としの終りの大祓
行ひきたれる古礼なり
行事の大事を申さんに
誰もこと〴〵をさな子が
つぎ〳〵成長成人し
わざを勤むる時いたり
国益進歩のたすけをし
其国其地をよき国と
海外諸国の人にまで
国旗の光をかゝやかし
日本帝位大帝位
おのがすみかと定めつゝ
年中時々のおこなひを
うれしきは人にぞ有ける
かさなりて草木しげれり
しろかねもこがねも玉も
そのやまをうがつも人よ
さればこそ人てふものは
ことさらにたふとかりけれ
いかなれば人てふものを
天地のかみの定めて
そこをしもおもひ廻せば
よの中に重きはあらじ
其人のすめる所も
其むらを田舎とよばせ
その人のおこなふことの
其国をよしとほめさせ
それのみかすめる其世を
それ〳〵によばするものは
あめつちの宝をとりて
人はこれ物のなかにて
ほこりがにいひをるをのみ
あらじとをしれ

反歌

よの中にうまれし人よこゝろせよ
世のよしあしは人ぞうみける

かくばかり尊きものと
よの中につくりましけん
人ばかりなすべき業の
よの中に多きはあらじ
其人のすめるがまゝに
其さとをみやことよばせ
よしあしのわかちによりて
その国をあしとそしらせ
よきよともあしかる世とも
よの中の人にありけり
よの中のうまきを喰ひて
よのなかの尊きものと
よの中の人の道には

○日本歴史歌

一天四海をしろしめす
神武天皇日向より
大和の国に宮造り
崇神天皇其御代に
七百年代其時に
日本武の御東征
八百年代其時に
征伐したまひなびかせて
日本帝位のそのはじめ
西国中国うちなびけ
夫より凡五百年
四道将軍さだまれり
景行天皇しろしめし
それより東国成就せり
神功皇后三韓を
九百年代応神の

御代より漢字つたへたり
土地も開けて繁昌し
欽明天皇其御代に
これも大いにこの国の
一千三百其時代
文物制度備はれり
桓　武天皇其御代に
みやこを移したまひけり
平の将門謀反して
一千八百その頃に
つゞいて源平交戦し
鎌倉時代と皆よべり
南北朝とわかれけり
吉野の宮にてしろしめす
足利時代といひそめつ
永禄年間此時に
織田の信長其次に
徳川家康　将軍と
国の政事をあづかれり
徳川時代と称するも
それより時勢うつりきて
世界国々渡海して
それより万国行通ひ
文明開化の世となりて
明治の御代とぞ成にける
帝位は一百二十の余
世界にしらるゝ時はきぬ

それよりまず〳〵国開け
一千二百年代の
仏道始てつたはれり
開化の助けをなしたるぞ
孝徳天智の両朝に
一千四百五十の頃
大和の奈良より山城に
一千六百その頃に
秀郷これを退治せり
保元平治の乱もあり
頼朝はじめて将軍府
一千九百其すゑに
後醍醐天皇まつりごと
京都は北朝其時を
二千二百のその時代
天下豪傑皆起り
豊臣秀吉其次に
つぎ〳〵朝命奉じつゝ
それより諸国に諸大名
太平ほとんど三百年
二千五百のこの時代
開港交易うちすゝめ
日本維新の時きたり
東のみやこも出来そひ
紀年は二千五百の余
万国無比の大日本
つとめよ励めよ日本人

おこたるまじきはこの時ぞ

○古典歌

世界のはじめ大空の
はり出すちから高みむすび
かむとたかむのはりあひで
それよりひとつわかれいで
うましあしかびひこぢの神
あまたのあめのはじめなる
これまでいつゝの神みたま
それより国の常立と
次なるかみはとよ雲ぬ
それより次にふたばしら
うひぢにすひぢに二柱
そのくみあひのふた神ぞ
世界にたちてあるものゝ
次はおほとのぢおほとのべ
始とこそはしられけれ
ひとつは満面具足して
ひとつは敬ふおこりにて
それを助くる力あり
よろづのものに行わたり
鳥もけものもうを虫も
互にしたひてそのうちに
むすびたまへるその道の
うみの子孫のしげりあふ
ことわりふかき神がたり

中にひとつの御中ぬし
圧する力かみむすび
あまたの時代をへつらんが
いでたるものを何といふ
これや造化のわけみたま
次にはあめの常立と
別天五神と申なり
くにつ世界のみおやがみ
わかれひろまる其時代
並びましつゝいつよあり
のぼれるものとくだれると
次はつぬぐひいく杙と
うごけるものとうごかぬと
これやしな〳〵あひくまん
次はおもたるかしこねよ
不足を救はん徳をもち
たらへるものを尊ひて
次はいざなぎいざなみと
万物草木人間も
めとをと互にたちわかれ
たかみむすびとかみむすび
本末つきずよろづ代に
これや神代の七世とて
それより高き日の神の

神の大御名大ひるめ
人てふものゝものしりて
それよりつゞく日の本の
大御名天のおしほみゝ
天くだります高千穂や
神のみことのその次は
これや神武の父みかど
つきせぬ基の御始よ
国にありへし大国主
杵築の宮の宮ばしら
事のかまへも広大に
並びたちつゝすべらきの
人は人の世善悪の
神は神の世幽界に
さても尊き天皇の
伊勢はみかゞみ天照す
こゝの宮居はいにしへの
熱田のみやは神剣の
神璽のたまは大君の
されば世の人おもべし
いづもの宮にことはじめ
伊勢の宮居にのこしまし
よそほひかへて結構を
礼と皇居の儀式なり
大嘗神嘗これぞかし
おのづと定まるすべらきの
おもへば〳〵尊としな

天照します大神は
道理を究めてあふぐかみ
天つ日つぎの御正統
つぎはにゝぎの命にて
あまたの時代彦火々出見
大御名うがやふきあへず
かみをまつりてよををさめ
抑人の世日の本の
それをばいづもにまつらせて
このうへもなき大やしろ
それよりかみごとよのこと、
よゝにつきせぬ高御座
賞罰正しくしろしめす
おの〳〵さだめの神はかり
三種の神器あなかしこ
神のみかげとあふぎます
すがたをかへぬ宮造り
宮いかめしくおはします
みもとにしづまるかん宝
広大きはまる殿づくり
むかしをかへぬ質朴は
つぎ〳〵すゝむよの事に
かざり給ふは御即位の
親切きはまる御神事は
これみな遠きむかしより
つきせぬ道とはしられたり
おもへば〳〵限なし

世界あまたのその国の
とり〴〵ながらみなともに
森羅万象こと〴〵く
つとめはげみて怠らず

○桃太郎誦歌

汝よ汝桃太郎
そのしま人をよくなつけ
しまのたからをとりかへり
人にもみせてよろこばせ
我等も汝がちゝはゝと
まことに汝は君に忠
あらよろこばし桃太郎
わが日の本は神代より
御位さかゆる国なるぞ
能ある人をよくもちゐ
神武天皇神代より
国をひろめて人を増し
人のまことのつとむべき
千代に八千代にそのさきに
かぎりなきまでさかゆべし
議員となれることあらば
小なることにそねみあひ
国に対して罪なるぞ
をさなき時は幼稚園
心の器量を大にもち
それをば互にせぬものと

ひらけのはやきとおそきとは
あめのます人つとめつゝ
世の用ならぬものはなし
ゆくべきものは人の道かな

はやその嶋にゆくならば
日本の徳をも蒙らせ
天皇陛下にたてまつり
汝がいさをゝ顕はさば
人によばるゝことならん
まことに汝は親に孝
汝心に記臆せよ
いく百代の天皇の
さてその国の国体は
劣れる国をよくたすけ
うけつぎませるはかりごと
つぎ〳〵物をさかんにし
わざのかぎりをつくさせて
桃の花さき実もむすび
もしもそのまに桃太郎
国の事業を大にせよ
国の事業をあやまらば
サア働けよ桃太郎
学校勉強おこたるな
ちいさきことのほめそしり
心にかけよ桃太郎

汝はめでたきものなるぞ

なにゝたとへてうたふべき
　こよひの月のすめるかげ
ちりもつもらぬおほそらそ
　ますみのかゞみかしら玉か

奉祝立皇太子

古調今調二首歌

天ざかるひなもみやこも
　おしなべていはへることの
よのなかにおほかる中に
　たふときはけふのほぎこと
うれしきはけふのみいはひ
　すべらきのさかゆく御代に
わか御子のみくらゐさだめ
　さだめますきみがこゝろよ
さだまれるきみがみうへよ
　いかさまにうれしかるらん
いかさまにたふとかるらん
　わがくにはむかしもいまも
うごきなき君がみくによ
　ます〳〵に国のみいつを
よそ人もそのたふとさを
　そのうへによろづのことの
とりましてさかえませよと

神代よりうけつたへます
さるからにたふときくによ
よそまでもうちかゞやかし
まつふさにしりてあふぎて
その国にあらんかぎりは

誰もみな祝へる御世に
たふとさを千代とことほぎ
もろ人のあふぎ楽しむ
　右古調

さだまりませる若みこの
つると亀とによそへつゝ
　右今調

すみ田川の
　ほとりなる
　　某楼にて
　夏の初の頃
　　よめる今やう
さくらのわか葉
　はなあやめ
人のこゝろも
　むかふじま
あや瀬のなみに
　あやみえて
月もすみ田の
　すゞしさよ

さだめます日つぎの御子の
うれしさを千代とうたひて
けふにもあるかな

その御位の千代八千代
世のなかこぞりてあふぎけり

○祝言

しらぶる琴もふく笛も
　ふしさだまれる人の道
おや子兄弟むつまじく

つきせぬさかえぞたのもしき

○笏の記

いにしへの人覚悟すべきことを、笏にしるすと、おのれ、いま朝廷の恩命によりて、衣冠の身となれり、もとより国につくさんとすることの地を得たるがごとし、故にまづ、笏にしるすこと左のごとし

一議を発し、一事を処するに、左の三言に照らして、そむかざるをよしとす、私事においても又しかり、

進取、文明、尚徳、

規言かくのごとし、又記す悠久国家の発揚を期し。わが大帝爵の天皇は。祖宗博愛の政事を本とし、維新五條の誓言を実にし。終に世界になしたまふことあるべし、海外無帝共和国の政事のいできたるは、後日、有帝和楽政府のいできたらんことをしるに足れり、又詠

日のもとの中の都を人とはゞ
はこだてなりとはやくこたへん

美静　謹而これをしるす

明治二年九月

○あるときの作

天高し、地広し、天下のこと、すべて永遠、人智の進歩はまた限あるべからず、故に其ひろかるべきを、ひろからしめ、其あつかるべきを、あつからしむべし、人情あつからざれば、物を究むることうすし、物を究むるの要は、人道を究むるにあり、人道は、進取と尚徳とにありとしるべし、また其すゝむるに道あり、これを詠せるうた三首

ともすればいそぐあまりにまよふなり
おこたらぬこそすゝむなりけれ

あかつかばあらふ道ありたびころも
のやまの水にみがきつゝゆけ

あたひなきものはあらじなくらす日も
ひと日すてなばひとことを得よ

○ある所の園遊会にてしるしける詞

園遊会ばかり、楽しきものはあらじ、感情ふかきは、まことにこの園遊会なり、花の色、梢の趣、感情ふかし、またその遊べる人の挙動をみるも、感情ふかし、こゝのいはほ、かしこの泉、そのほめやう、評しやうによりて、その人の心胆も、みらるゝものなり、男女うちつどひて、にぎやかなるはよろし、かたまりすぎて騒がしきはわろし、前なる人にしたしうすとて、うしろなる人にうときはわろし、すゝむべきにすゝみ、とゞまるべきにとゞまり、丁寧にすぎて、卑屈なるはわろし、これらの感情まことに限なし、

あの蝶のとびかふをみよ大空に
かけてもゆかず泥にしも居ず

すべてよの中のこと、動くべきに動かざるは人にあらず、その動くに、度あり、礼あり、これを人の道といふ、

○人のしるべ

○人はみな、其国其世の用にたつべきことを、つとむべきものなり、されば、其身ををさめ、其家をとゝのへ、人の人たる道を、つくすこと肝要なり、

○人幼なる時は、父母及師の教育をうけて、成長し、としさかんなる頃、専ら人事をつとめ、それよりまた、その子孫をはぐゝみ、

老をやしなひて、若輩人の、しるべともなるべきものなり、
○教育は、専ら身をたて、道を行ふことをしるにあり、をしふる人まなぶ人、みな其適度順序を、違へざるやう、弁知すべきことなり
○わが日本国の人民たるものは、さしあたり、日本の用にたち、君命をおもんじ、国民たるの分限義務をつくすべし、つゞいて、他国人の益徳をもなし、よその感賞にもあづかるべし、国に彼我の別あるは、勿論のことながら、人の交通は、また天の道としるべし、
○人の世にたつ、おの〳〵其職業あるべし、また得る所の技芸才能なかるべからず、また其なす所の何職にか、はらず、其職に対する功績をなさんとおもふべし、功績あれば、名誉あり、これによりて、おのづから、人の資格そなはり、国民たるの道に叶へり人々全く国民たるの道に叶ふときは、つもりて其国も名誉ある国となりて、其国全く国たるの本体をそなふべし、人たるもの、此所をよく〳〵心得べきことなり、
○わが日本国、もとより名誉ある国なり、神武天皇、天統をつぎ、位につきたまひ、それよりして、君臣の道定まり、天壌無窮将来ます〳〵、さかんなるべし。この道、つひに万国の、あふぐ所となり、通常帝国の外、大帝爵のくにといふ称誉をも得るにいたるべし、
○わが帝国の事業は、神武天皇のそのまへつかた、邇〳〵芸の命、帝道を開きたまひ、もとより国土に自立せし、神孫大国主の命に、くにゆづりをなさしめ、これを出雲に祝ひたまひ、その後、専ら天神の遺訓を法とし、武事以て国をみちびきをさめ、文道以て智を誘ひ、物を増殖すること、し、つゞいて、代々の天皇、其時代〳〵代々の適度をとりて、世を開誘したまへり、
○天皇代をかさね給ふこと、やゝ久しうして、物の制度をつくりなしたまひ、かの天下交通の道をもとりもちゐ、海外の事業をもわが国の用にたてたまへり、これよりして、漢土の教義、天竺の行法をも、世につたふること、はなりたり、
○天皇の、みちびきたまひし所と、時人の、よろこびし所とあひ合して百事みなすゝみゆき、所謂進歩を主とせしこと、其時代もやゝ久しかりしなり、
○しかるに、其師とせし所の、漢土の政事、をさまらざりしより、それと交通することうとくなりしかば、日本の進歩も、わすれたるが如くなり、また人のもちまへなる怠りといふこといできて、帝道のたゆみを生ぜしかば、やゝ不良のことおこり、これを制するが為、国すこぶる艱難の場合にいたりたることあり、
○かくのごとく、日本の国事、怠りを生したる時といへども、君臣の道はあきらかなり、また世人中にも、おのづから豪族ありて、やゝ進歩の心がけあるものもありたり、しかれども、政事のとりしまりなき時なれば、こゝろざしある人の事業は、皆よにそむくことに類し、罪名を得たるものすくなからず、このときよりして、これをしづむる為に、武家といふものいできて、しばらく、国の政体を一変したり、
○国の艱難なるとき、世を鎮撫せし人は、功臣なり、其功臣名誉を得るにまかせ、貴重の官職をさづかりて、武家といふ家風を生したり、其政体泰平を主とせしはよろし、進歩といふことを、わすれたるはわろし、人たるものくれ〳〵も、進取のこゝろざしを、抱くべきものなり、これ天下の通則なるがうへに、別して、わが大帝爵の国体にあづかれることなり、
○国の制度は時々あらたまることあるものなり、風俗も時々あらたまるものなり、しかれども、国の大典と大礼とは、古法これを尊

しとす、すなはちわが国の大典は、君臣の分明らかにして、本にあつくするの礼義備はり、神祇を崇め、祖先をまつり、天道をおそれ、古事を重んず、これわが古法古訓なり、また父母に敬事し、妻子を親愛し兄弟のまじはり、衆人の交際等、皆其大体は、古来の道にして、その損益は時の宜しきにかなふを生とすべし、

○人としては、徳義を重んずべし、しかれども、其徳義の軽重を評すること、容易のことにあらず、まづ国に忠あり義あり、人に信あり実あり、事を処する緩急宜しきを得、親子夫妻兄弟の和睦より、其家事の整理、或は事業に対する功績をなす等、これすなはち、徳義の重きものなり、官職にある人、官威をかりて人を凌侮し、また人の撰挙にあひ、其担当すべきを、ゆるかせにし、また公共の利を後にして一身の利を計る等、非徳といふべし、

○時の制度によりて、人を撰挙し、あるひは依托し、公共の利を望むことあり、其被選人選挙人等の資格は、其政事上、おの〳〵心中に、法式あることながら、人を選挙するにおいては、おの〳〵前條の徳義を思考し、心算怠るまじきものなり、いやしくも、これをゆるかせに考へて、事功の有無を論し、国家の良否を評する等は、抑意を注ぐべきことなり、

○世の公益をはかるには、必、党派の運動をもなさゞるべからず、しかかれども、これをなすに、大いに思考すべきことあり、まづ其主義、大義、大利に分明なる立説を主とし、前にのぶる、徳義の実行あるにあらざれば、首領ともなるべからず、首領者ともあふぐべからず、おもんはからざれば、しらず〳〵の過誤をとることあるべし

○人としては、世の往昔を知り、今事を考へ、また将来のことをおもはずしては、叶はざることなり、まづ、世の中のこと、其なりきたりたるありさまを目安とし、それに幾層の増加を考へて、将来の進歩事業の増殖をおもふべし、今事は猶小なり、将来必大なるものとしるべし、それをうみ出すには、必、本義あることをもさとるべきことなり、

○わが国は、前にも述ぶるごとく、帝爵中、一大帝爵の名誉を得ることあるべし、まづ武を用ゐるに、一には未開の境界を愛護して、世界の欠典を補なひ、一には本域の防衛を事とし、進守の両道、其用法を怠るべからず、文道においても、一は他の発明を採取し、一は固有の種根を養ひ、共に濶大の真理を考究すべし、これわが国の大体なり、

○前條の大意を採取せる、一首の吟を試む、

おもへ人世は人をうみ人はまた
よしあしの世をうみいだしけり

○人たるもの、嗜好の慾、遊戯の興をおもふこと、これも人道中の一事なるべし、其欲する所、あくまで徳義に妨なきをよしとし、又高尚なる方をねがふべしこれもつもりて、国の名誉上に関係あり、ゆるがせにすべからず、

右に述ぶる所は、つね〳〵思考中の一、人のしるべの一節をしるすもの也、

明治廿二年夏日

○嘗花文談の中

人はみな、幼よりして長し、人たるの業をなし、世のなかの事を、つぎ〳〵によき方に趣むかしむるものなり、

諺にもいへり、人は万物の霊と、すべて、天地間にあるもの、霊なり、長なり、うを、むし、とり、けものも、みな、おの〳〵心なきにはあらず、しかれども、人のごとく、心の揃ひたるものなし、

心の揃ふといふことは、まづ、むかしのことをしり、此後の事をおもひ、或ひは他のことをみならひ、またよき事をなさんとし、あしき事に懲る等の心なり、

よき事にさま〳〵あり、大いなるよき事、ちひさなるよき事、また人の為となるよきこと、わが為となるよきこと、また一方にはよきことながら一方にはあしとおもふよきこと、かくのごとく、さま〳〵なるを、よくしりわけ考へわくる等、これ人たるもの第一のこと也、

鳥けものも、親をしれり、しかれどもわするゝこと早し、人は其たぐひにあらず、おやをおもふことあつし、兄弟、朋友にもあつし、師の恩をしることもふかし、

人には礼義といふことあり、約束といふことあり、うやまふべきを敬ひ、あはれむべきをあはれみ、守るべきをまもり、ほこるといふことをわろしとしり、あなどるといふことはすまじきこと、心うべし、

世にはかちまけといふことあり、あしき事にはまけたりともよし、よき事にまけぬやうにと励むべし、

人は食養を欠くべからず、時計もまかざれば、鳴らず、人はみな、学ぶにあらざればしることなし、まなびたる後も、徳高き人にまじはりて、時々よきことをきくべし、この事を怠るときは、人にして食養を欠き、時計にしてまかざると同じ、ゆるがせにすべからず、つゝしむべしおもふべし、

○人々出世のあらまし

諺にいふ、人は万物の霊と、まことにしかり、万物の霊、万物の長なるがゆゑに、教育といふをしへかたに、ねんいれざれば、よきものとなり難し、これ万物のうちにても、よき品、必要なる品ほど、其やしなひかたに、ねんいれざれば、そだ、ざるが如し、稲麦を、野の草のごとくに、すておきては、成長せず、またうし馬などを、猪鹿のごとくに、なしおきて、得らるゝものにあらざるが如し、されば、人たるもの教育の道を大切にして、おひおひ、よき人となり、そのよき人が、おひおひ、国をよくして、よき国となし、よき世となして、かの万物の霊長たる職をつくすべきことなりかし、また万物の霊長だけありて、其まじはり方にも、其さだめなくんばあるべからず、ゆゑに、徳義といふことあり、法律といふことあり、また身をやしなふみちあり、心をやすんずる道あり、これ等のこと並べていはゞ限なかるべし、まづ人々出世のあらましをいはゞ、かの教育の道をふみ、つぎつぎに、身の行ひを怠らざるにあるべし、其順序、とし立を以て示すこと、左のごとし、

うまれて、十歳までは、父母の教育といふうち、六七歩かたは、母の教育によるものなり、父は其費用の出しかたをつとめ、母は其まなばせかたの注意肝要なるべし、十歳より、廿歳までは、父の注意、七歩かたなるべし、母は父の注意のたすけをなすべし、

廿歳より、三十歳までは、当人の注意肝要なり、父母は其費用を出すと、また徳義ある人に、交はらしむるの、てだてをなすべし、

卅歳より、四十歳までの間は、習ふこと、、またならひしことを、用にたて、試をなすべし、何事にもせよ、其報謝と、給料を得るは、人の常式のことながら、この年間にては、得るといふことは、第二となし、費すことの、理にかなふか、かなはざるかを、はかりかへりみるを、第一とすべし、かくなして、随分大いなる試業をなすべきは、この年間を以て、さかりとなすべし、

この時、得んとすることをむねとする人は、四十有余五十六十にして、大いなる報謝給料を得んとおもふの心なき人としるべく、

また大いなる快楽を得て、天地間に、その人ありしと、世に名をのこすべきことをも、好まざる人といふべからん歟、人々おもふべきことなりかし、

四十歳にして、全く世の為となり、人の為となることをなし得、かの報謝給料を得べき身となり、かの万物の霊長たる、人たるの職を尽すべき身となり、なるべき丈、高尚なること、有益なることに従事し、なるべきだけ、道によりて、得る所を得、其得たるものゝ、処分をも、注意すべきことなるべし、

道によりて得るといふは、其正当なる得かたをいふ、正当なるとは、其業と、報いと、過不足なく、また僥倖にあらざるをいふ、

すべて、人たるもの、徳義を尊び、年を増すに隨ひ、人に信任せられ、身も上り、人をもたすけ、妻子の恵養をもなし、本にむくい、末をはかり、くいなきの計略をも、おもふべきことなり、すべて人たるもの、進取といふことを、おもはずしては、人道に背き、また万物の霊長たるの行ひにあらずとしるべし、これ等のことをおもひ、これらのことをつとむるも、多くは、この四十五十の年間を以て、さかりとしるべし、又身のぼらんほども、まづ、見定めのつくべき場合なり、人々、まことにおもひつとむべきは、この四十歳より、五十歳までの間なるべし、

よの中の人、他人の幸栄あるをみる時は、たちまちそれを羨み、その如くあらんことをねがふものなれど、まへにいへる、十歳、二十歳、また三十歳までの、場合をふまずして、ふと、その位置に到らんことは、まことに、なし得ざること、心得て、もし、わが最愛の子、まごをして、栄えしめんとおもはゞ、其心して、其教育に、ねんを入れざれば、口をしきことなるべし、くれくれも、人は其教育と其習はしとに、よれるものなることを、おもふべしおもふべし、

五十歳より、六十歳までは、おのれが、なせる道々に、もしおもひ違ひあることあらばと、省みて、これを直すべし、正すべし、かれは、あのやうなりし、人誰がしは、しかありし人なりと、いはるゝも。またこのとし頃の、人徳によれるものになん、また老をたのしむの心かまへ、肝要なるべし、およそ、この年間を以て、山の頂にいたりたりとし、昔日のことをもおもひ、あの道は、けはしかりし、かの日はたのしかりし、またあのをりは、つらかりし、などおもひ、またわれは、いかばかりの人なり、人はいかにおもふことなるらしなど、おもひみるべきことなりかし

六十歳已上とならば、みがくべき心の限をつとめ、美事、善事によりて、名をのこさんと、心がくべし、この心は、百歳にいたる後といへども、たがふことなかるべし、怠るまじく、ゆるかせにすまじきは、教育と、またこの年間によりてのおもひさだめ肝要なるべき歳、右にいへるは、まづ男子に就ていへるなり、女子は、とし若くしていへの内事をつかさどり、子を育つるものなれば、男子の廿歳を、十五歳にあて、男子の卅歳を廿歳、男子の四十歳を、三十歳にあて、つぎつぎに、あてあらためて其心もちゐを致すべきことなるべし、男女とも、凡かくの如くして、成長せば、かの稲麦に其養をやり、又牛馬其他よき品を、とり扱ふ心よりも重く、かの万物の霊長たる人の人たる道には、かなふべきことなりかし、いさゝか、おもひ得たる一考をしるして、以てしめす所なり、

十ハ子供　○人の道早わかり

子供は、皆いろ〳〵の教育にしたがひまなび、時として、人の使人たることもあり、人にしからるゝこともあり、ほめらるゝこともあり

おの〳〵十年間、段々とすゝむことを心がくべし、
心ハ父母教師、又おのれを引立つる人を、仰ぐこと、
廿ハ若イモノ　若イモノは、年輩の人のしたることを、見もし、
きゝもし、何の業にかつかんと、心にこれを定め、つらきこ
とたび〳〵をしのぎて、これを堪へ、物ごと怠らず、
心ハ後日、何ごとか、人の人たる道を、ふまんとす、
卅ハ出来た　出来たといふは、人から称せらるゝこと、あの人が
あのことを修行し出来た、何かさせて見たいものなりと、い
はるゝとき、ほこらず、傲らず、勉強すべし、
心ハ人の信用に、あふか、あはぬか、それをかへりみるべ
し、
四十ハ是非々〳〵　是非々〳〵は、心も詞もつよきこと、人の信用に
もあひ、自分もなさんとおもふこと、障ありとも智をふるひ、
身を労して、働くの最中なり、
心ハくるしみと、楽しみ、相半ばなる頃、
五十ハアノ人が　アノ人が仕た事、此ことあり、彼のことありと、
そのなしたるあとを、人にもいはれ、おのれも人に告ぐべき
時なり、人の上品下品、凡定まりたる年輩なり、
心は後悔することもあり、安心することもあり、
六十ハエヘ々々　エヘ々々ハ笑ひの声なり、人のなすことを見て、
何も皆承知したることなり、あれはあのやうなるもの、これ
はこのやうなるもの、エヘエヘと、笑ひの中より、人の為に
なることをおこなふべし、
心ハもの案じ多し、又楽しみも多し、
七十以上は、おのづから人たる道をわがものと行ひて、六十の人
よりは、又高かるべし、

鶯花園主ハ福羽美静先生の片金碎玉こゝにこれを編綴して一小冊子と成し以て同好に頒つもとより先生風月に嘯傲せらるゝの余事この小冊子のよく悉すべきにあらずその全璧にいたりては蓋し他日を俟ちて完成するところあらんとす

明治廿五年の春最好き処において　幻々野村傅これをしるす

福羽美静先生　硯海の一勺終

明治二十五年六月廿九日印刷　正価金拾弐銭
明治二十五年六月三十日出版
編　者　野村傅四郎
発行兼印刷者　大橋新太郎
印刷所　日本橋区本石町三丁目十六番地
東京築地活版製造所
京橋区築地二丁目十七番地
東京日本橋区本石町三丁目
発兌書林　博　文　館

「扇のことば　福羽美静先生述」

野村傳四郎執筆

ああ、あつし、あつしとて、扇を手にならすは、この頃、夏のさかりの人のわざなりけり。おのれ、さいつとし、よみて、人にもかきて、遣はしける歌あり。

誰が手よりもおこさばおこる風ありと
あふぎを人におぼえさせけり

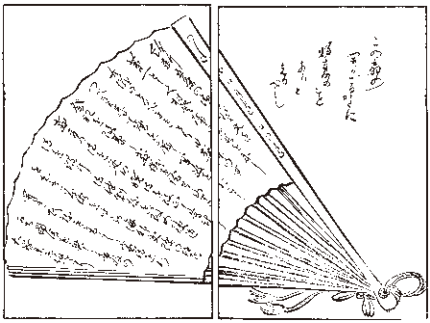
このうたの心は、扇によりて感情をのべ、世のなかの人々は、みな新らしき風をおこして、世のたすけとなるべきことをは、よかしとおもへばなりけり。いまのよのありさまをみるに、維新の帝業を、たすけ奉るとはするものの、みな、数百年の日本毎事になりたることなれば、変更をいとひ、胆力になりよし新事業を、ならふ人ありとも、その芸術に止まり、天下の大活動に対して、いつも策になり、上古の淵源ある政道にくらぶれば、実に歎息のいたりといふべし。方今、学問により、誉をたかくし、事をみがく人数々なり。まことにたふとぶべし。しかるに、その人々が、新らしき風をおこすことあるは、中々にすくなし。よしこれあるは、みな、そのみなもと浅くして、そのすゑの流ひろからず。おもふに、これは、新発的の師を尊ぶのみをしりて、その先達の、労したるみなもとふかきくるしみを、おもふことの浅きによれるなるべし。おのれ、わかかりしときの友だちどもが、王政復古にいそしみしときのことをおもへば、今人よりは智者すくなし。しかれとも、まごころある人は、おほかりしが如し。その人々は、おのづから、みなもとあるながれをたどり、世の中は、武家風さかんにて、とてもそれを一新することは、かたき時なりしも、やむべからざる理由、ふかき復古の淵源をおもひ、それが為につくしたる先輩のあとをつぎ、みな労したることなれば、なしがたき時を至来せしめて、聖運ひらけ、復古維新の時機にあふこととはなりたりしなり。さて、その時におもひけらく、まづ、ひとつのよろこびにはあひたり。しかれども、この後のことあやまりたらんには、まことにおもきことなり。今二十年たたば、しかありなん、五十年たちなば、しかやあるらん、とおもへりしこと、さま〳〵なることなりしが、そのおもふが如く、はこべることすくなし。これをおもへば、かの先輩どもが、事をなさんとして、時の刑戮にあひても、手に手に主張することありて、かの、おの〳〵、わが手よりおこしたる風をもて、世をあふぎたてしその力は、まことにするどきものなりしなり。今も、その如く、皆人々力をつくし、大事にいそしみ、いささかもせめきにあひて、心をゆるめざるやうにせざれば、叶はざることなり。何事にもせよ、なさんとすることには、この心ありたきものなり。およそ、国の為、民人のためには、技芸学術をたくましくし、要路には、胆力正大なる人をならべ、技人をして、それ〳〵の技能をこころみのばしめ、これをはげまさざればかなはず。世のなかのことは、百年を一期とし、五十年をば、その中間の段階とす。これを、このあふぎにたとふべし。この扇の、なかばばかり開きしところは、すでに、すぎゆきし廿五六年のあひだの所なり。まづ、この年間、そのおこなひし大事を、この扇面をみてしるべし。その、なほ行はざることは、開かざるかたにありとせん。これ実に、国家の大事なり。これをおもへば、わが身のことならねど、まことに、あつし、あつし。あたかもこの炎天のごとし。

この扇の
開かざるかたに
将来のこと

ありとしるべし

《扇面》

維新五条の御誓文を第一とし、人材登庸の実をなし、古儀のとるべきをとり、旧弊のすつべきをすて、旧を廃し、軍政をおこし、祭祀を改革し、教儀を論せしめ、また、教育の法を定め、税法を改正し、会計法を設け、法律制度を改め、鉄道をしき、美術をすすめ、海外交際の道を開き、民度を高くし、憲法をわかち、国会を興し、帝政の大器具を備へたり。



さて、国会の開設、その実徳を得んとならば、心を大にし、国挙りて、海外にあたるのことをおもひ、業をおこし、民度をたかくし、歳入を増さしめ、その歳出は、将来の事件をおもふの大業へ対しては、吝むことなく、剰余はなきに至日も、憂とせず、確乎たる大計を定むべし。復古維新などいふ文字も、今はふるし。まことは、明治勃興といふこととなし、後世にも、その称をつたへさせたきことなり。琉球を、うちに入れしはよし。「からふと」交換はいかん。明治十年前と、十年後との政事界に、大小ありといふあらば、歎くべきことならずや。かの交換も、このままにては、後世の批評、いかがあるべき。むかしと違ひ、今日の政事は、国民みづからのことなり。考ふべし、考ふべし。およそ、内をまもらんとするには、外に対し、理由ある事件をおこすことありて、その事ととのふときは、いはずして国家治まるものなり。上古の王政、また各武家のおこりし時をみてもしるべし。又、古代、そのふねに乏しく、測量に学なき時すら、英勇は、かならず遠大の心ありしものなり。今にも、そのあたりのことを論ずる人あれども、みづからの小量に心づかず、はやざとりにさとりて、海外のことは、某々の強国すら云々なり、などいひあきらめて、これをすつることあり。また、たま〳〵その事に手を出したるも、彼我の論を先にして、浅薄の勢を見られ、圭角を争ふの失策あり。今日、世界交通をしりながら、船艦をつくるにおくるることあり。国の境域に合せて、比類なき数多の人員をもちながら、殖拓の道を疎にす。武家の起りし時を見ずや。みづからの一藩をたもたんとしてすら、そのかまへをなし、全国に、数多の城郭を築きたり。これを飜案しても、軍人を出し、船艦を多くすべきの理はさとるべし。国会の開設は、何ぞ国民の与論をもつて大事を行ひ、上古になし得ざる所の、安心なる帝国の、大策を行ふべきものなるぞ。いつも此事に到らずして、光陰を過す、実にをしむべきことなり。人に党派あるはよし。しかれども、目前の大事をすてて、今日をあやまることあり。これをばつつしむべきことなり。これらをおもはざれば、国会も、時勢をおこすの実益なし。かくの如き風を手におこす人は、誰ならん歟。ああ、おもへばあつし。このたぐひのことに対してのぶれば、実にかぎりなかるべし。ああ、あつし、あつし。

明治廿六年八月のはじめつかた

鶯花園のあるじ

六十三翁　美静　しるす

○

ちなみに曰く、おのれ口を開けば、淵源あるまつりごとといふ。これは、国体に応ずるまつりごとといふことなり。古来、その例をいへば、神武天皇の、日向の旧都をいでて、東州にむかひたまへり。しかして、そのおもんずべき道をおもんじ、神祇をあがめ、人民を愛し、また、したがはざるは、武威をもつてなづけ、悪をこらし、善をすすめたまふ。これより、後の御代御代も、その掟にしたがひ、時機を得ば、かの三種の神器をさきにすすめ、つづいて皇位を、漸次、本国におきたまはんとしたまへり。これ崇神天皇、景行天皇の御うへにうかがはれたり。その後、奈良の帝都、又山城の京城をはじめたまへるも、みな同一徹なり。また、漢土の道をとり、印度の教をとりて、己が開化をましたまへり。これみな、その利用を主として、国体にとりて、すこしも其変すまじきは変じたまはず。故に、漢土はかのくにのありさまに応じて、王姓数度変じ、印度も、後年、衰頽をきたせり。わが日本国のみは、ます〳〵厳然たり。現に、海外の技をならふも、また此心と同じかるべし。只、近来人心の狭隘なるより、忠をおもへば狭隘の忠を欲し、孝も義も、またみな同じ。はやくこの風俗を変化し、要路は、かの胆力正大の人をならべる技をのばし、学人武人も、その能を試み、衆民は、業をみがき、その度をたかくして、国力を強からしめ、帝国をして大事を誓ひ、事を議するには、そのみづからおもふことありとも、大小緩急をはかりて、まづ一大方針をさだめ、この国をして、此まゝにあらしめざることを、勉むべきことなり。人々この所に心をひるがへし、古昔の、律義を称したるをしへをおもはず、今日は、衆人衣食住の進度を心がけ、国家は、国家の体裁をおもんじ、その費すべきを費し、その省くべきを省き、はやく、かの明治勃興の時代と称へきを、　天皇陛下をして、比類なき明徳をしきたまふの世と、あふがすべきことなり。これによりておもへば、文武のことを興すに、大きに注意あるべきなり。海外の新制を、己が国体にあはせ、その採るべきをとりて、一種の用法を定むべし。又、美術なり、文字用法なり、他に、彼我をいふ所の分界とは、事違ひたることあり。そは、古来、日本開化におもむきしときのそのはじめと、その結末とを考へてしるべし。あたかも都会にては、その遠きあたりの地にてつくりし、百般の事物を集会して、繁栄を極むかのすがたありとしるべし。その大体をおもはずして過ぐすときは、何事も齟齬すべし。風俗のこと、歓楽のこと、また美術をもてあそぶ等のことも、これまでの、風俗恭敬の風を執し、将来、これに加ふることをなさざれば、天皇陛下の外交に対しても、不十分を感ぜしめ、陛下をして、外国にほこらせたまふの時なかるべし。美術の境界も、またかくの如し。将来、価値ある美にうつさずして、これが国風なり云々、などといふときは、かの価値にまけを生じ、これも、陛下の御額に、汗を生せしむるの恐あるべし。古代日本の進取をとりしときの忠義は、今日の如き、小胆忠義にはあらざりしなり。また、官府の、民に対するの計略も、各藩の余弊をうけたることおほし。其改むべきをば改めざれば、かの民権云々のいひ草を、励まさしむるが如し。これもをかしきことと、人やいひぬらん。前に、淵源ある政事を、とはのぶることどもなり。これをおもひてやまず。これ復古を欲し、維新を希ひしの心なり。これもまた、おもへば今日の炎天の如し。

美静又しるす